

第四百十八回 青葉会 句会報

令和三年二月二十五日(木) WEB句会

選者 川口孤舟

投句・選句 伊賀山そらお 今井紀久男 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 小早健介 在間千恵  
 佐藤ただしげ 朱牟田恵洲 土谷堂哉 豊田ゆたか 中川雅夫 長谷見びん 福島正明  
 古田昇 星田啓子 宮内規雄 山崎亜也 山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄  
 安部眞希子 重枝孝岳 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 松崎浩 村田くに子  
 山本三恵

《互選句》○は選者の特選 ◎は孤舟選者の選

九点 酒よりも酒の座恋し春寒く 恵洲 (紀・健・忠・千・孝・ゆ・允・び・浩)

八点 受験子の父に借りたる腕時計 五郎太 (眞・紀・龍・堂・昇・啓・○天・三)

校庭に搾油小屋あり島椿 びん (紀・眞・恵・ゆ・允・正・亜・け)

廃校の備品貼り出す村の春 全 (そ・紀・眞・堂・雅・○正・く・天)

◎窓少し開け立春の朝に触る 盛雄 (紀・○孤・孝・ゆ・隆・く・○亜・け)

七点 ◎夢にしか逢えぬ人見ぬ今朝の春 びん (紀・孤・千・○龍・隆・浩・く)

ゆつくりと話かけつつ雛飾る けい子 (紀・孝・堂・雅・允・昇・天)

六点 細枝の揺れて鶯飛び去りぬ そらお (紀・千・雅・啓・浩・け)

．．．間近で見た枝先の鶯の姿が忘れがたい

紫雲英野に寝転び宙の深さかな 孤舟 (紀・○五・恵・龍・堂・三)

◎囀りや保育園児の長い列 正明 (紀・孤・忠・雅・隆・○規)

五点 冴返る弟余命二年とや 紀久男 (健・忠・隆・び・盛)

．．．大腸の末期癌

◎菜の花やお染久松三味に乗り 全 (孤・五・○健・た・敏)

．．．文楽「野崎詣り」

万病と親しくなりぬ老いの春 忠彦 (そ・紀・隆・正・規)

鳶の輪の大きく傾ぎ風光る 孤舟 (○紀・五・健・○恵・雅)

日脚伸び迷ひし鉢の置き所 堂哉 (○そ・紀・孝・び・○浩)

四点 恵方巻き春来る方に口を開け 忠彦 (紀・隆・○昇・盛)

かぎろひの草原を発つ熱気球 孤舟 (そ・紀・五・亜)

春寒しナースコールの鳴り止まず 全 (紀・忠・規・啓)

◎この古道往けば鎌倉梅眞白 五郎太 (紀・孤・恵・く)

平坦(たいら)なる道に躓き春寒し 恵洲 (紀・た・ゆ・啓)

楽友や句友や如何に春を待つ 堂哉 (紀・健・正・く)

剪定を終へし庭師と酒談義 全 (紀・五・た・允)

種を蒔く手のしなやかに見とれおり

ゆたか

(紀・忠・孝・敏)

◎下萌に若き日想う里の道

雅夫

(紀・孤・○孝・ゆ)

◎雛出せば座敷の奥に入る日差

全

(紀・孤・恵・盛)

半音上げて終わるコーラス春うらら

正明

(紀・く・○け・三)

◎風強く潮を押し来て波の花

啓子

(そ・紀・孤・允)

派手な縞つい買ひにけり春のシャツ

亜也

(紀・龍・天・○盛)

静(いさか)ひて離れて投げ足下萌ゆる

けい子

(紀・眞・恵・亜)

春寒や夢二の女(ひと)の長き首

全

(紀・○堂・正・啓)

春うらら病院帰りはハンバーガー

天牛

(紀・○眞・千・亜)

春の雪我が故郷も皆老いる

全

(そ・紀・忠・び)

三点

いつの間に届かぬ高さ辛夷咲く

五郎太

(紀・亜・け)

魯山人みむと春陽に誘われて

千恵

(紀・び・三)

デコポンのこぶをざっくり春近し

ただしげ

(紀・昇・け)

雨戸練る実に立春や日の光

堂哉

(紀・○啓・浩)

「いぎワクチン」と墓穴を出づ世は眩し

びん

(紀・啓・三)

遠出せず隣の庭の梅を愛づ

昇

(紀・ゆ・盛)

二点

梅見頃句も詠みたしとワンカップ

紀久男

(昇・浩)

仁左・玉三郎(たま)の二月歌舞伎座大入りに

全

(敏・び)

長老が建国の日に国乱し

忠彦

(紀・眞)

古池へ鳥獣戯画の蛙跳ぶ

孤舟

(紀・○千)

春昼や好きなアリアに浸りけり

千恵

(紀・龍)

春宵の一人酒かな誕生日

全

(紀・敏)

◎ひっそりと生垣に咲く寒椿

ただしげ

(孤・規)

酒酌むも耳の遠さよ春夕べ

ゆたか

(紀・○三)

駆け回る幼児の笑み春の空

全

(○た・規)

師をおくる温き日差しに恩懐う

雅夫

(紀・敏)

．．．私の古文書の先生です。

正明

(紀・健)

春の地震(ない)男性優位もぐらついて

全

(紀・天)

常態の在宅勤務桜餅

全

(紀・天)

◎薄氷に風の描く幾何学模様

昇

(孤・盛)

◎日の光愛ほしむかに雪割草

全

(紀・孤)

恋猫に不要不急の逢瀬なし

全

(び・允)

ぎぎぎいと鳥鳴く窓辺梅咲けり

啓子

(紀・た)

電柱を遊び場となす雀の子

全

(紀・た)

タイトル染めビルの隙間に冬夕焼け

全

(紀・敏)

感染の数を追いつつ春迎え

そらお

(紀・正)

．．．毎日の国内感染情報に一喜一憂

規雄

(紀・昇)

引鶴の声高らかに飛び行けり

天牛

(紀・千)

一人居や節分の豆買ひそびれ

盛雄

(紀・天)

春泥に七半飛ばす女子大生

全

(紀・堂)

一点 冴返る東北なるの余震また

紀久男

(五)

孫娘鬼滅衣装で豆を撒き

忠彦

(紀)

蕾抱き二月の樹木始動せり

全

(紀)

如月や経費少なき年なりき

五郎太

(紀)

古家の解体進む風ぬくし

全

(紀)

球春や待望久しき応援歌

健介

(紀)

オプジーボ治療受く友冴返る

全

(紀)

春の夜のやすらぎ破る大地震

千恵

(紀)

「朧月夜」の唱歌で知るや菜の花忌

ただしげ

(紀)

寒空に皓皓と照らすウルフムーン

全

(龍)

未だ慣れず二月の天皇誕生日

恵洲

(紀)

餌(え)に群れて二月の野鳥啼かぬなり

全

(紀)

……実景。冬の間毎日餌台に各種餌を出してやります。スターはメジロとシジュウカラ

あたたかや火の見櫓ある宿場町

恵洲

(雅)

お一日木魚の音の春めける

堂哉

(紀)

巢籠の部屋にひと挿し梅香る

ゆたか

(規)

籠居に来るは鳥のみ春夕焼

全

(紀)

木の伐られ春忘る町にコロナ跳ぶ

雅夫

(紀)

梅白く庭の日向に歌いおり

全

(紀)

神々の声聞こえたり花の森

びん

(孝)

コロナ禍の少し収まる春の雨

正明

(紀)

特訓の初音の調べ誇らしく

昇

(紀)

紅白に咲き分くる梅半蔵門

啓子

(紀)

待春や唄うたふなり「早春賦」

規雄

(紀)

身も心も凍り付きたる夜(よる)の地震

全

(紀)

春節や炷香(シユウウ)奮発関帝廟

亜也

(紀)

釣果期し黙々と剥く餌浅蜷

全

(紀)

テキサスがカナダになりぬ凍返る

全

(紀)

二月や十年前のような地震

天牛

(紀)

まだ家に居る(ステイホーム)と言ふのか春一番

全

(紀)

言祝ぎて羽ばたく若や卒業期

盛雄

(紀)

【句評】

九点句 酒よりも酒の座恋し春寒く

恵洲

浩さん・・・実感。

八点句

受験子の父に借りたる腕時計

五郎太

堂哉さん・・・うん十年前の思い出でしょうか？父は子の成功を願い、子は期待に応える覚悟の試験!!試験用紙が配られ、第一問に目を落とした瞬間が浮かんできました!

啓子さん・・・合格を祈念する親御さんの思い、それをお守りとして腕に巻く受験生。微笑ましくも緊張が走ります。こちらも一緒に祈りたい。

天牛さん・・・今時素朴な受験子ですね。きっと試験は成功したでしょう。

廃校の備品貼り出す村の春

びん

堂哉さん・・・近年、廃校の再利用も若者の手であるようです。この村ではどうなったでしょうか？

雅夫さん・・・私の入学した富山県の村立学校、もうないでしょうね。

校庭に搾油小屋あり島椿

びん

恵洲さん・・・伊豆大島でしょうか。珍しい景色を捉えられました。

◎密少し開け立春の朝に触る

盛雄

孤舟さん・・・まだ寒さが残る朝、そつと窓を開けて立春の外気に触れてみる。

隆さん・・・朝の空気で立春を感じる情趣。「窓開けて入る空気や春立ちぬ」でも。

亜也さん・・・ジュンブンガクっぽい表現が好きです。

七点句

◎夢にしか逢えぬ人見ぬ今朝の春

びん

龍平さん・・・この方がお見えになったらどうするのでしょうか。ハグする。今どきヤバイです

けど、色々想像を掻き立たせてくださる句。

隆さん・・・夢にはしばしば逢えぬ人が出てくる。未明の夢は正夢と言われ気になったりする。

浩さん・・・すでに亡き人进行ののか、恋破れた人への想いなのか。切なさが伝わります。

ゆつくりと話かけつつ雛飾る

けい子

堂哉さん・・・我が家では、娘に全部譲ってしまいありません。代わりに小さな御内裏様とお姫様だけを飾っています。

紫雲英野に寝転び宙の深さかな

孤舟

五郎太さん・・・春になりましたね。

恵洲さん・・・宙の高さでなく深さで行ったところが良い。

堂哉さん・・・気分爽快！宙の深さに惹かれました。

六点句

細枝の揺れて鶯飛び去りぬ

そらお

・・・間近で見た枝先の鶯の姿が忘れがたい

啓子さん・・・時に拙宅の庭でも同様のことがあります。鶯が飛び去った影と細い枝が揺れている景を素直に詠まれてなお余韻を感じこの句からも離れがたい。

浩さん・・・動きが見えるよう。

紀久男・・・我が家の借景の裏山はゴルフ場です。鶯が好い声なんです。未だ本調子ではありません。ベランダに雀に交じってパン屑を食べに来たことがあります。

◎囀りや保育園児の長い列

正明

孤舟さん・・・秀逸です。囀りに混じって保育園児の甲高い声が聞こえてくる。

隆さん・・・園の外歩きは子らに緊張と喜びを与える。運転も注意するときです。

規雄さん・・・園児らの黄色い元気がいっぱいの声が聞こえてきます。まさに、賑やかな小鳥たちの囀りの声です。気持ちが明るくなりました。

五点句

冴返る弟余命二年とや

紀久男

・・・大腸の末期癌

隆さん・・・季語が上手。「弟の余命二年（ふたとせ）冴え返る」でも。

知人の消化器外科医が「余命二カ月は分かるが、それ以上は分からない」と話し

ていたことがあります。予想を裏切り回復へ向かわれますように。

びんさん・・・身辺の人たちが病んでゆく。身に沁みる眩きですね。「切れ字」の「や」で下の句を終えるのは難しいとか聞いたことがあります。三段切れではあるし、これではいかげしでしょう。「弟の二年の余命冴返る」

盛雄さん・・・あまりにも辛い、厳しい一句。『冴返る』の季語は悲しすぎる。

◎菜の花やお染久松三味に乗り 紀久男

・・・文楽「野崎詣り」

孤舟さん・・・明るく華やかな舞台。

五郎太さん・・・東海林太郎の歌も聞いてみました。

健介さん・・・古典芸能に題材を求めたユニークな発想に敬服。そう、「お染久松」の野崎詣りは「菜の花盛り」でしたね。

ただしげさん・・・野崎村の段切が目には浮かぶよう楽しい。

万病と親しくなりぬ老いの春

忠彦

隆さん・・・芭蕉の句「カピタンもつくばはせけり君が春」を思い出した。病と春は正反対だが、正反対を取り込む度量の大きさ、春の大らかさ。旧かなで「老ひの春」でしよう。

紀久男・・・実感籠っていますね。

孤舟

鳶の輪の大きく傾ぎ風光る

惠洲さん・・・輪が大きくかしいだところを捉えた写生眼に拍手。

紀久男・・・江の島吟行で番鳶の見事な輪舞を見たことあり。季語の斡旋も良く素晴らしい句です。

日脚伸ぶ迷ひし鉢の置き所

堂哉

浩さん・・・春近しの雰囲気が漂う。

紀久男・・・高野山の麓の機屋の広い庭の「さつき（米躰躰…コメツツジ）」の鉢を思い出しました。

#### 四点句

恵方巻き春来る方に口を開け

忠彦

隆さん・・・一年の始まりは、大きく口を開け吉を取り込みたい。

昇さん・・・幸運を招来する恵方巻。コロナ終息を切望する句と読みました。今年の恵方の南南東を「春来る方」と表現したのがお手柄です。

盛雄さん・・・日本の食文化に定着。中七がユーモラス。

紀久男・・・関西の風習が商魂で全国区になりました。恵方巻は季語にもなりつつあるようです。

春寒しナースコールの鳴り止まず

孤舟

啓子さん・・・コロナ禍に既に一年。感染者増で医療は逼迫。季語と相俟って、必死の治療と看護が続いている様子が余すところなく表現されていると感じます。この現状に胸が痛む。紀久男・・・夜勤看護師は少人数で対応する為、明け方は疲れ切って不機嫌でした。

◎この古道往けば鎌倉梅眞白

五郎太

孤舟さん・・・古道と白梅は鎌倉に相応しい。

惠洲さん・・・関東地方の各地に、いざ鎌倉という時に駆けつける為の「鎌倉道」が残っている。梅眞白 季語が効いている。こちらも特選候補でした。

平坦（たいら）なる道に躓き春寒し 惠洲

ただしげさん・・・情景が共感できて良い

啓子さん・・・歳には逆らえない足運びの鈍化。情けなくも、日常のあるあるですが使われた季語がふと覚えた哀しさを告げて妙と感じます。

紀久男・・・躓いて転ぶのはよくやりますが、近ごろ転び方が上手くなったのか（？）怪我しなくなりました。

楽友や句友や如何に春を待つ 堂哉

健介さん・・・楽友は？ 句友は？ 私も同じ心境です。

種を蒔く手のしなやかに見とれおり ゆたか

紀久男・・・何の種でしょうか。ちよつと艶っぽいですね。

半音上げて終わるコーラス春うらら 正明

けい子さん・・・半音上げてに春らしいコーラスの明るさを感じます。

◎下萌に若き日想う里の道 雅夫

孤舟さん・・・若芽の淡い緑に、ふるさとの幼友達の顔が思い浮かぶ。

◎雛出せば座敷の奥に入る日差 雅夫

孤舟さん・・・日差しも「お久しぶり。待っていましたよ」と雛を歓迎しているのだろう。

惠洲さん・・・薄暗い座敷が雛をしたら、何だか明るくなった感じかな。

盛雄さん・・・雛祭りの関連句が少なくなったのは寂しいですね。

◎風強く潮を押し来て波の花 啓子

孤舟さん・・・「潮を押し来て」が「波の花」を活写している。

派手な縞つい買ひにけり春のシャツ 亜也

盛雄さん・・・コロナ禍自粛でうつつとうしい日が続く中、春シャツに粋な縞を選んだ作者の気持ち

ちはよく分かる。

諍（いさか）ひて離れて投げ足下萌ゆる けい子

惠洲さん・・・男女の仲かな。本気の喧嘩ではないので少し離れているだけ。本当は好き同士では？

亜也さん・・・映画のワンシーンのようです。

春寒や夢二の女（ひと）の長き首 けい子

堂哉さん・・・季語が誠にピッタリです。六、七年前に夢二の生家を訪ねました。飾り気のない、

ひっそりとした佇まいでした。

啓子さん・・・春寒と夢二、その人の書くはかなげな女性のうなじを合わせられ、一瞬にして夢二の世界に連れて行かれるようです。

紀久男・・・類想句がありそうです。

春うらら病院帰りはハンバーガー 天牛

眞希子さん・・・たとえ一病を抱えていても、ハンバーガーを食べたい、食べるということに生命の躍動感が感じられました。

千恵さん・・・いい天気診断結果も良くて今日は蕎麦じゃなくハンバーガーだなと元気が出た気分が季語ともマッチしていると思います。

亜也さん・・・検査結果が良かったのでヘルシーじゃなくてもちよつとはOK...と理解しました。

これも春の誘う気分かも。

紀久男・・・回復に向かって足取り軽くマックで買い物。季語がぴったりです。

三点句

五郎太

いつの間に届かぬ高さ辛夷咲く

亜也さん・モクレン科は結構大きくなるし樹冠に花が付く感あり。

紀久男・辛夷はやはり仰ぎ見るのがいいですね。毎春楽しみにしており、私には春が来たと強く印象づけられる好きな木です。

魯山人みむと春陽に誘われて

千恵

紀久男・都心に住む人はうらやましい。かつて廬山人の食器で東山の料亭でご馳走に与ったことを想い出しました。

デコポンのこぶをぎっくり春近し 　ただしげ

紀久男・中七の表現がいいですね。

雨戸繰る実立春や日の光

堂哉

啓子さん・雨戸を繰る、今は見かける事の少なくなった引き戸になっている雨戸でしょう、一枚引き開けると柔らかな、しかし強い光が真っすぐに差し込んできました。中七の、実(げ)にとという言葉で　ああ、今日は立春！将に春の光！ご自身の朝の目覚めと春のめざめが重なる。光溢れる一日の始まりを愛でたい。

浩さん・最近あまり見かけなくなった雨戸。なつかしい季節の移り変わりの風景がうかぶ。

「いざワクチン」と墓穴を出づ世は眩し　　びん

紀久男・上五の「いざワクチン」がとぼけていて俳諧味あり！

二点句

梅見頃句も詠みたしとワンカップ

紀久男

浩さん・気持ちが変わりますね

古池へ鳥獣戯面の蛙跳ぶ

孤舟

千恵さん・古池ときたら蛙、すると私の大好物の鳥獣戯面が登場しあのユーモラスな蛙を思い浮かべて頬が緩みます。

紀久男・高山寺の国宝、何度も拝見しましたが、芭蕉の有名句に引つ掛けて句に詠まれるとは何とも愉快ですね。

春昼や好きなアリアに浸りけり

千恵

紀久男・ヴェルディの「椿姫」でしょうか。赤ワインを飲みたいものです。

春宵の一人酒かな誕生日

千恵

紀久男・独りで祝杯とはちよつと淋しいですね。

◎ひっそりと生垣に咲く寒椿

ただしげ

孤舟さん・寒気の中、健気に咲くさまは鮮やか。

酒酌むも耳の遠さよ春夕べ

ゆたか

紀久男・ご本人が一番辛いですよね。上手く句に詠まれております。

駆け回る幼児の笑み春の空

ゆたか

ただしげさん・幼子のはしゃいでいる様子を上手く捉えていて楽しい

春の地震(ない)男性優位もぐらついて 　　正明

紀久男・時事俳句として面白い作品。

◎薄氷に風の描く幾何学模様

昇

孤舟さん・水面を渡る風に歪み、やがては解けてゆく儂さ。

盛雄さん・幾何学模様は新しい発見か。早春の一時を上手くつかんだ佳句。

◎日の光愛ほしむかに雪割草

昇

孤舟さん・寒さに耐えるように咲く花はいかにも可憐で日の光を甘受している。

恋猫に不要不急の逢瀬なし

昇

びんさん・昨日(2/28)の「日経の文化欄」に夏井いつき先生の「悪態俳句のすすめ」と言う随想があり、お弟子さんのこんな句を紹介されていました。「ほつといてくれよ恋猫なんだから」・・・丁度「不要不急」と読み合わせて思わずくすり。猫の恋は時も処も選ばず天下御免のようですね。

ところで同紙の黒田杏子選「俳壇」では、「ご注意を！マスクは季語ではなくなりまして」そうです。何をいままら。伝統文芸は時勢に処するに鈍ですね。

ぎぎぎいと鳥鳴く窓辺梅咲けり

啓子

紀久男・・・梅の蜜を吸うのは目白と鴨ですが、この啼き方は鴨のようですね。目白を追っ払うので好きになれません。

電柱を遊び場となす雀の子

啓子

紀久男・・・近頃スズメを見かけるのが少なくなり一寸気になります。電柱は鳥も来ますから要注意です。

タイル染めビルの隙間に冬夕焼け

啓子

紀久男・・・都心ではよく見かける光景を句に作られています。

一人居や節分の豆買ひそびれ

天牛

紀久男・・・いつもはご家族同居だったのに一人留守番していますとこんなことに。

春泥に七半飛ばす女子大生

盛雄

堂哉さん・・・何で女子大生と分かったのかな？

### 一点句

球春や待望久しき応援歌

健介

紀久男・・・選抜の高校野球、そしてトラキチ待望の「六甲おろし」待たれます。

オプジーボ治療受く友冴返る

健介

紀久男・・・最先端の高額治療。助かったんでしうか。季語が効いております。

「餌(え)に群れて二月の野鳥啼かぬなり

恵洲

・・・実景。冬の間毎日餌台に各種餌を出してやります。スターはメジロとシジュウカラ

紀久男・・・冬場の野鳥は句の通り殆ど啼きませんが、山雀は餌をねだって網戸に掴まります。

ベランダに出て掌にひまわりの種を載せると取りに来ます。四十雀は山雀のおこぼれを食べます。目白は蜜柑が好きで、食卓に置くと取りに来ます。

あたたかや火の見櫓ある宿場町

恵洲

雅夫さん・・・私の住んでいる枚方もこんな町です。

籠居に来るは鳥のみ春夕焼

ゆたか

紀久男・・・我が家も同様です。コロナ収束 待ち遠しい。

木の伐られ春忘る町にコロナ跳ぶ

雅夫

紀久男・・・団地の玄関の大櫓が病気で伐られたまま一年経ちました。句の通り春の芽吹きもななく、コロナ蔓延っております。

梅白く庭の日向に歌いおり

雅夫

紀久男・・・梅が歌うという表現が斬新で面白い。

紅白に咲き分くる梅半蔵門

啓子

紀久男・・・門の左右に紅白梅あるのか、一本に両方咲いているのか、どちらでしょう。半蔵門が効果的です。

身も心も凍り付きたる夜（よる）の地震 規雄  
紀久男・・・東京は震度3でしたが怖かった。  
テキサスがカナダになりぬ凍返る 亜也  
紀久男・・・電力パンクのテキサスが気の毒。

§ § § § § § §

### 次回青葉会

・三月二十五日（木） 午後一時半 ～ 午後五時 文京区民センター会議室  
当季雑詠5句 投句は3句まで。

◎緊急事態宣言が23日（日）まで延長になりました。文京区民センターを使うのはこの23日が最後になります。



### 令和三年二月 青葉会報

一、 三か月連続のWEB句会で天牛さんはじめ23名36句の投句頂き、ご覧のように恵洲さん、五郎太さん、びんさん、盛雄さんが好成績でした。先月お知らせしました弘子さん退会には皆さまショックだったようで、中には寂しくなる、納得できないとコメントして来られた方もおられました。眞希子さんの選句FAXに万里子先生が2月23日の天皇誕生日に満33歳となられ、ご長男の友実さんが施設のリモートで面会され、お二人のプレゼントのブラウスに満面の笑みを浮かべられた由のご報告がございました。天牛さんや弘子さん、啓子さん、忠彦さんにはFAX転送しましたが、ご希望される皆さまには転送又はコピー郵送しますのでご連絡下さい。

次回青葉会ご通知欄に記したように、文京区民センターの利用は次回が最後になりますが、五郎太さんが新著持参されますので、乞うご期待！

小生の「大向う」に就きまして、正明さん、堅さん、敏郎さん等からご感想頂戴しました。感謝申し上げます。

### 二、 関係者近詠

傾聴に徹して介護士石蔭の花	眞希子	寒の月右往左往世を嘸ふか	陽亮
どうしたら「愛」といふもの待降節	全	その盛り見ぬ間に紅葉散りにけり	全
コロナ禍と世代格差と木の葉髪	全	飛石のここを青山冬の蝶	全
ふさふさの大根の葉も朝の市	弘子	介護五年御用納めの無き五年	全
くつきりと木目の板もて北塞ぐ	全	坂田藤十郎逝く	
灯の底に寄り立つ人や社会鍋	全	扇雀時代を妻と語らふ小春かな	紀久男
しぐるるや傘に聞きたき母の声	全	おでん酒鴈治郎二代偲びをり	全
		顔見世や頭取部屋に手土産を	全
		「森の座」二月号	

寒の内しんかんと今朝始まりぬ 規雄

——「NHK俳句」3月号 西村和子選——

亀鳴くや世の片隅に長らへて	允章
ゆつたりと浸かる昼の湯日脚伸ぶ	全
ぬる爛やゆっくり暮れる春の空	全

生き生きと夢追ふ虎の春キャンブ	盛雄	如月やワクチンなしで友快癒	紀久男
籠る日を泰然と生き日向ぼこ	全	選抜の球児にエール春を待つ	全
鬼貫の句碑寂しかり霾ぐもり	全	積ん読を断捨離せよと枯木立	全
立春や白く眩しき予定表	健介	寒見舞伊丹御免酒生一本	全
待春やまん丸ふくらむ雀たち	全		
立春やラジオ体操二十年	全		
つくづくと枯木に似たり八十路坂	全		

きさらぎ句会 二月

三、 日経俳壇二月 より小生好みを抄出してみました。

・黒田杏子選

鬼火と遊ぶ津波碑の雪をんな	桃心地 (大船渡)
寒鴉マスク咬へて山へ去り	大成金吾 (愛知)
よろけつつまたよろけつつ雪を掘る	柳村光寛 (長岡)
大寒に開花宣言核禁止	桐谷篤輝 (横浜)
出雲人寡黙にすする寒のそば	原真里子 (松江)

・横澤放川選

万能のワクチン満載宝船	山崎 晃 (東京)
山眠るカミオカンドを懐に	船所信一 (松坂)
木枯の夜は言水はた誓子	稲垣 長 (みよし)
コーヒーの流体力学寅彦忌	小林紀彦 (高萩)
生者死者雪の匂ひにすれ違ふ	長瀬道子 (取手)
若沖のにはとり猛る冬画廊	渡邊邦晴 (一宮)

令和三年三月十日

紀久男 記